



「珈琲とエンピツ」の1シーン。左が今村彩子さん

素顔の映画人

今村 彩子

「珈琲とエンピツ」

ろう者や難聴者を主人公にしたドキュメンタリー映画を撮り続けている女性監督がいる。自身もろう者の今村彩子さん(32)＝名古屋市緑区＝がその人。「聴覚障害者を描いた映画でも、聴者(こえる人)が作っていることが多い。私なら、同じ立場からろう者や難聴者の本音を引き出すことができる」という信念で、これまで「めっちゃはじけてるー豊ろうっ子ー愛知県立豊橋ろう学校の素顔」(第3回名古屋ビデオコンテスト優秀賞受賞)をはじめ、数多くの作品を手がけてきた。

昨年、ろう者のサーフショップ&ハワイアン雑貨店の店長、太田辰郎さんを主人公にした長編ドキュメンタリー映画「珈琲とエンピツ」を製作、全国各地の劇場で公開中だ。

満面の笑みで客を迎える太田さんは、コーヒーをいれてジェスチャーで勧め、エンピツを使った筆談と手話、身振りで楽しげに交流する。コミュニティ

は言葉だけじゃない……そんなメッセージ性のあふ作品だ。今村監督は自ら出演してサーフィンも体験し、ナレーションも務めた。



彩子さんの活動をマネジャーとして支える母親の加代子さん(左)

ろう者のドキュメンタリー 同じ立場で本音引き出す

っていました。それに映画製作は人とのコミュニケーションが必要なんです。最初、娘には難しいのではないかと心配でしたが、「でも、自分で『やる!』と決めたら人の意見は聞かないし、納得できないことには絶対妥協しません。反対したらケンカになるだけ」と苦笑する。

大学在学中にアメリカへ1年間留学したり、カメラを担いで海外取材に行ったり、東北大震災の後、何度か被災地を訪れてろう者の被災者取材したりと、精力的に活動する娘を明るく送り出す。「最近、社会的にも意義のある仕事している娘を誇りに思うようになりました」。顔を見合わせて微笑む2人の表情から、愛情と理解の深さが伝わってくる。

今村監督が現在取材を進めているのは、母親がろう者で、聴者の父親と1歳の子どもがいる群馬県の3人家族。「子どもは父親と話す時も、母と話す時と同じように手話を使いますし、言葉も使います。この子の中では、言葉も手話も全く同格のコミュニケーション手段なんです。この子がこれから母親がろう者であることをどう受け止め、成長していくのか知りたい。出来上がるまでには10年ぐらいかかると覚悟しています」

ろう者のドキュメンタリー映画をずっと撮り続けていく、という今村監督の姿勢は揺るがない。(映画評論家 高野史枝) 次回回は9月19日です。